

新型コロナ禍時代を考える

弘前医療福祉大学

学長 下 田 肇

新型コロナウイルス感染症が日本に上陸してから早一年以上経ちました。江戸時代の「黒船来る」のような状況にも似ているようです。

この一年間が過ぎるのがとても速く感じたのは私だけでしょうか。毎日のようにコロナの話題がマスコミに報じられ、その流行程度や範囲等に一喜一憂している昨今です。

新型コロナ感染パンデミックにより、ウイルスに対してコロナうつ、不安障害、恐怖症などの発症が増加して、社会的弱者にその傾向が強いとされています。

感染予防に対する対策として、そのリスクから身を守るための技術や動機付けを強める働きかけを社会全体として実践することが大切であります。

私たちの生活様式は大きく様変わりして三密を避け、マスク常用、手洗いの励行など義務的に行うようになりました。しかしその一方で最近は不要不急の昼夜の外出制限、昼夜の時間外の外食禁止、飲み会懇親会の禁止、友人との食事のままならず食事のマナーは食べる時以外はマスクをすること、黙々と会話をするべからず、家庭内でもマスクを外さないことなど（「談笑」という言語が死語になりそうです。）、私たちの日常は大きな制限を受けることになりました。新型コロナウイルスとの戦いの中にあって感染症にかからないためだけに生きることが全体的になっていることは誠に困ったことです。

ワクチンの接種が大いに期待されていますが、その効果—副反応等についてはこれから検証される必要があるでしょう。少なくとも5年以内は集団免疫としての効果は出ないだろうともいわれています。

マスク常用がこれからの新しいファッションに定着することになるのか、そうではない社会が一日も早く来ることを強く願う次第です。

先生方には不本意に始まることになったオンライン授業や院外実習の中止—延期などこれまでに経験したことのない中で、学生が安心して勉学できるよう、様々な工夫や役に立つスキルを見つけてほしいと思います。